分野別研究組織成果報告（2007年度）

英国人鉄道技術者の貢献と人材面での自立過程
ー英国側資料の補完による実証分析ー

The Contribution of British Railway Engineers and the Technological Independent Process

林田 治男（HAYASHIDA Haruo）

表記のテーマの一環で、初代技師長E. モレルの経歴調査が大きく進展した。1841年11月17日ロンドンのピカデリー・ノッティングヒルで生まれた。ロンドン大学キングス・カレッジを卒業した。23歳の若さで英国土木学会会員に推挙された。セイロン島の鉄道建設に従事した後、日本に赴任した。来日後、大隈重信夫人の小間使いを娶った。既存研究ではほぼこのように主張されていた。

しかし現地調査によって、これらがすべて間違っていることが判明した。ワイン商を営むThomas Morelは38年９月22日にEmily A'Beckett（父親は事務弁護士）と再婚し、Emily（39年生まれ、母親と同名）、Edmund、Agnes（42年生まれ）の３人の子供ができた。Edmundは1840年11月17日、Piccadillyの一角No. 1 Eagle Placeで生まれた。母Emilyは46年８月１日、自宅で事故死した。Thomasは50年５月16日、Christiana Lodder Buddと再婚し、直後にNotting Hillに転居した。彼は60年11月24日、肝臓病のため52歳で死亡した。祖父母の代から中産階級だったといえる。

モレルは57年１学期間のみKing's College Schoolで学んだ。欠席が多く、成績は優れていたわけではなかった。58年１月King's College, LondonのDepartment of Applied Scienceに進み、Lent Termのみ在籍勉学した。成績は「並」だった。４月以降のEaster Termは欠席が多かった。この頃Edwin Clarkに師事したので、DASは中退したと思われる。ドイツやパリの工業学校、WoolwichのRoyal Engineerでも学んだ。

Edwin Clarkに、58年５月から３年余師事した。その後、計約２年間豪州、NZで技師の仕事に従事した。62年５月、会員のClarkらの提案と推薦により、土木学会に準会員として加入した。加入規定の25歳に半年足りなかったが。

66年１月China Steamship and Labuan Coal Co.に雇われ、鉄道建設に携るべく北ボルネオのLabuan島に赴いた。着任直後、測量・積算を行い、具体的計画をCSLCに報告した。労働力の手配ができず、CSLCも資金を提供しなかったので、鉄道建設計画は中座した。68年３月まで、Labuanにいたことは確認できたが、来日までの動向が判然としない。70年４月９日に来日した。

62年２月４日、ロンドンでHarriett Wynderと結婚した。Harriettは、70年４月16日英国をたち６月７日に来日した。その後、多くの場合夫妻は行動を共にした。71年11月５日、横浜で死亡した（30歳）。夫人も12時間後の翌６日に急死した（25歳）。夫妻に子供はいなかったと思われる。

かくして家庭環境、学校教育、実務経験が明らかとなった。赴任前後の経歴を調べ、技能形成という視点から、赴任の動機と日本での貢献をより鮮明にできようになった。

他の土木学会・機械学会加入の22名の技師の経歴調査もかなり進展している。